

## 第 104 回 歴史リレー講座「興福寺と藤原氏」 吉川 真司氏 (R5.5.21)

この7月から、いよいよ興福寺五重塔の修理工事（～令和13年）が始まります。これを機会に興福寺と藤原氏との具体的な関係をたどってみたいと思います。ご存じのように平城京の町並みは碁盤の目状ですが、実は長方形ではなく東側が出っ張っています（外京）。興福寺はこの外京に位置しており、東七坊大路を隔てて東側には東大寺があります。ともに若草山の麓で平城宮よりも標高が高いため眺望に優れています。

興福寺は創建以来、たびたび火災や戦いによる部分あるいは全体焼失を被っています。そのため現存する建物のほとんどが鎌倉から江戸時代に再建されたものです。金堂と講堂は、当時1000人もの僧侶たちが暮らしていた僧堂にぐるりと囲まれています。東金堂の南にそびえるのが五重塔。そして金堂の西側にある北円堂の南には、かつて東金堂と対を成す西金堂（江戸時代に焼失）がありました。東院と称される東金堂と五重の塔に対して、この一帯は西院と呼ばれていました。現在、北円堂の南にある南円堂（平安時代）は何らかの事情で実現しなかった「西側五重塔」の代わりに建てられたと考えられます。

治承4年（1180）12月28日、平重衡らによる南都焼討ちで興福寺は東大寺とともに壊滅しましたが、それぞれのやり方で復興を果たします。東大寺は重源という僧が源氏の協力を得て再興。中国の斬新な建築様式を取り入れた一方で、興福寺の復興では場所も様式も変更されませんでした。しかし、興福寺はその後も火難と縁が切れず、享保2年（1717）の大火災では東金堂、食堂、五重塔、北円堂以外すべてを焼失するという大打撃を受けます。明治維新の廃仏毀釈政策では堂塔以外すべて没収された（明治3年）ものの、11年後には復興が許可。その後は幾度となく修理を重ねて現在に至ります。

興福寺は一条院と大乘院という藤原氏ゆかりの二大門跡によって支えられていました。門跡は出家した皇族のための寺です。また、猿沢池の東側はかつて多くの塔頭で占められていました。

奈良時代に書かれた『興福寺縁起』を繙くと、天智天皇の時代に藤原鎌足夫人が夫の病氣平癒を願って京都の山科に造営した山階寺が前身とあります。飛鳥遷都のおりに厩坂寺と名を変え、平城遷都の際には鎌足の息子の藤原不比等らによって興福寺と改名されました。不比等は律令国家の立役者ですし、遷都のたびに都とともに移転することができたのは藤原氏の絶大な力のなせる業でしょう。

また、不比等一周忌（721年）に竣工した西院内の北円堂（八角円堂）は、元明ならびに元正太上天皇が長屋王に命じて建てさせたものです。このとき不比等の妻、あがたいぬかいたちほなのみちよ 県犬養橋三千代が中金堂に弥勒菩薩を造っています。そもそも八角円堂は死者の供養のために建立されるもので、法隆寺の夢殿や栄山寺（五條市）などが有名です。法隆寺はもちろん聖徳太子を、栄山寺は藤原仲麻呂が父を弔うために建立されました。

江戸時代に再建された南円堂（八角円堂）は、藤原冬嗣が父の追善のために建てたもの。のちに藤原家の主流となる藤原北家（冬嗣の子孫）の信仰を集めました。現在は西国三十三所の霊場として有名です。

東金堂は神亀3年（726）に聖武天皇が元正太上天皇の病氣快癒を祈願して建立。天平2年（730）建立の五重塔は光明皇后（不比等の娘）の発願によるもの。その目的は定かではありませんが、この工事には皇后自らがもっこ 畚で土を運ぶほど熱心だったこともあり、わずか1年ほどで竣工。また、光明皇后は同6年（734）には母の県犬養橋三千代の供養のために西金堂を完成させています。

ところが、天平9年には天然痘が全国で大流行。この頃から光明皇后の関心が興福寺から国分寺や東大寺などへ移っていったのは、国を護る皇后としての自覚を高めたためと考えられます。このように、藤原鎌足夫人が創建し、息子の不比等が完成させた興福寺は藤原氏の域を超えて天皇家が主導する寺へと変貌を遂げたあと、奈良時代後半には本来の藤原氏の氏寺へと回帰したわけです。

最後に、史料によると、現在も続く興福寺維摩講を始めたのは鎌足。鎌足の死後は不比等が引き継ぎ、毎年10月10日から鎌足の忌日16日までの一週間にわたり行われました。不比等の死後はいったん中断されましたが、天平5年（733）に光明皇后が復興しました。